

南海・阪急・阪神で巡る

関西あそび西歩

KANSAI ASOBO

京都・大阪・神戸・堺 まち歩きラリー

石畳路地の郷愁に誘われて大和田街道をゆく ～あの日の大阪のまちの風景が蘇る～

淀川流域に位置して、数多くの島々が浮かび、難波八十島の光景が広がっていた海老江(海老洲)。明治以降は大和田街道沿いの集落として栄え、戦災に遭わなかった地域は、いまでも石畳の路地や長屋が残っています。懐かしい大阪の下町情緒を満喫できるエリアです。

① 海老江

古代、旧淀川から運ばれる土砂によって小さきさまざまな砂州や島々が数多く形成され、この辺りは難波八十島とも呼ばれました。海老江もそのうちのひとつで古文獻などによると、かつては海老洲とよばれていました。戦災の被害が比較的、少なかった地域で、海老江7丁目には長屋や石畳の路地などが残って、下町情緒を今に伝えてくれます。

② 大和田街道

梅田街道ともいいます。起点は難波橋北詰で、海老江から西成大橋(1908年竣工。現存せず)、姫島、大和田、出来島、佃、左門殿川を通り、終点は大物(尼崎市)にいたる旧国道です。大物からは中国街道に合流し、西宮を経て山陽道として下関に達する主要幹線道路でした。大正15年(1926)に淀川大橋が架かって新国道ができるのと自然と廃れてしまいました。所々に大和田街道の石碑が点在しています。

③ 八坂神社

ご祭神はササノオです。その昔は、牛頭天王社と呼ばれていましたが、明治初めに八坂神社に改称されました。神社の創建時期は不詳ですが、境内にある石灯籠の年号が天治(1124～1126)または大治(1126～1131)と読めることから、かなりの古社と推測できます。また村の日記に永徳3年(1383)霜月社殿再建という記録もあります。元亀元年(1570)に、織田信長が石山本願寺攻めで野田城の三好一族を討とうとしたとき、戦勝を祈って先陣の将・荒木村重に命じて陣馬陣刀を献じました。境内には明治期に関西俳壇で活躍した松瀬青々の句碑「菜の花の はじめや北に 雪の山」と、西成大橋の橋柱があります。

④ 淀川改修記念碑(海老江中公園)

淀川流域は豊かな水量で農作物には恵まれましたが、一方で数多くの洪水にあいました。とくに有史以来といわれる大洪水が明治18年(1885)に起こり、さらに同22年(1889)、同29年(1896)にも洪水が続いて大阪は甚大な被害を受けました。これを契機に中津川を利用して新淀川を開削する計画が立案され、明治29年(1896)から淀川大改修を開始、明治43年(1910)によりやく完成しました。このとき、中津川流域にあった海老江村の北部90町余りが新淀川の河床となりました。

⑤ 羽間(はざま)文庫

故・羽間平三郎氏が江戸期の町人、天文学者・間重富(1756～1816)ゆかりの天文関係資料や大阪の郷土資料などを収集保存して羽間文庫と名づけました。文庫資料は大阪府指定有形文化財に指定され、その後、大阪市立博物館(現・大阪歴史博物館)に寄贈されています。間重富は長堀富田屋橋に生まれ、蔵が11あったことから十一屋と呼ばれた裕福な質屋を継ぎました。通称は十一屋五郎兵衛(7代目)ですが、のちに蔵が15に増えたので「十五楼主人」とも号しました。麻田剛立(1734～1799)に天文学を学び、職人に様々な観測器械を作らせ、天文暦学の発達に貢献。幕府から江戸に招かれて寛政の改暦事業に参加し、その功績で苗字を名乗ることを許されて間と改めました。江戸では伊能忠敬の指導なども行っています。大坂に帰って以後も四つ橋から天体観測と研究を続け、子の重新も家業と観測を引き継ぎました。その後、重遠・重明と4代にわたって御用観測が行われましたが、明治になって跡継ぎが絶えてしまいました。著書に『算法弧矢索隠』『星学諸表』『垂球精義』『天地二球用法評説』などがあります。

⑥ 南桂寺(郭公塚)

明治の始めに住職が傷ついた鳥を見つけて手当をしたところ、非常に美しい声で鳴くホトトギスで、一躍有名になりました。見物人が多く訪れて寺院周辺が賑わいましたが、金儲けを企んだ鳥泥棒が盗みだし、しかし村人に邪魔され、鳥泥棒はホトトギスを殺してしまいました。多くの村人が悲しみ、住職はホトトギスの霊を弔うために「郭公塚」を作って手厚く葬りました。羽根が現在も保管されています(南桂寺見学は要予約)。

⑩ 福島聖天通商店街

通称「売れても古い商店街」。かつて聖天了徳院に、水野南北(1760～1834)という放蕩無頼の青年がいましたが、院主の教えに感化され、熱心な信者に。その後、易相の大家となり、寛政から天保にかけて全国に3千人もの易相弟子を持ったといえます。そこから古い商店街の賑わいが生まれて、いまでは金曜日の宵には大勢の古い客で賑わうようになりました。また修学旅行生の商人体験などユニークな町おこしの発信地としても知られています。

⑦ 松瀬青々(せいせい)旧跡

俳人・松瀬青々が明治39年(1906)から大正10年(1921)まで当地に住んでいました。青々は明治2年(1869)、船場の新炭商の長男として誕生。本名は弥三郎で、北浜上等小学校を卒業後、丁稚奉公や呉服行商などを経て第一銀行大阪支店に入社しました。28歳の頃から俳句を学び『ホトギス』に投句したのがきっかけで正岡子規(1867～1902)と会い、第一銀行を辞めて上京し『ホトギス』の編集にあたりました。明治33年(1900)、帰阪して大阪朝日新聞社に入って朝日俳壇を担当。翌年『宝船』(のちに『倦鳥』と改題)を創刊して昭和12年(1937)に没するまで主宰しました。句集『松苗』『妻木』などを発刊。清澄な主観的人事句にすぐれ、関西の高浜虚子と言われました。青々13回忌に海老江に住んでいた頃の門人たちにより、南桂寺境内に「青々先生」と刻んだ碑が建てられています。

⑧ 和貴地蔵堂靖国寺別院

昭和20年(1945)、戦災の焼跡の中から石のお地蔵さんが掘り出されて、当地に安置されました。その後、昭和33年(1958)に浄財で御堂を建立しました。お地蔵さんの名前の由来は聖徳太子の十七条憲法の「和を以て尊しと為す」から名付けられました。

⑨ 聖天さん(了徳院)

数ある芭蕉句碑の中でも、真正正銘の松尾芭蕉を記する「杜若(かきつばた)塚」があります。浦江第一の名勝で、いまも境内の池の面には四季の花が映えます。とくに藤は、江戸時代中期から浪花名所案内にも載せられ、江戸の文人・蜀山人こと大田南畝も訪ねて日記に記しています。昔から庶民信仰が盛んで、株の相場師・遊女・商売人たちが足繁く参った寺ですが、近世勸化本には、易の大家・水野南北の霊験譚が語られて、今日でも1日、15日には易者が占いを立て、聖天信仰と相俟って人心を惹いています。またロシアとの交渉に寄与した淡路の廻船人・高田屋嘉兵衛も日参したとの物語も記されていますが、投機的な生業に賭ける人々からの信仰が篤かったことが窺えます。一方、水商売の仏様としても知られ、境内の玉垣・奉納品には曾根崎の芸妓の名前が刻まれています。

